

# 書体活字のナショナルリティ

渡辺 慎太郎\*

2000年2月20日

## 1 日本の書体は報われない

### 1.1 イスラエルからの大量返品

担当者は慌てていた。大阪に本社を置く大手家電メーカーがイスラエルに出荷したビデオデッキ3万台が、すべて返品されてきたからだ。製品は仕様をたしかに満たしている。しかしイスラエル側は憤慨しており、違約金を払ってでもビデオデッキは受けとれないという。担当者には、何がなんだか理解できない。

大手広告代理店を通じて調査した結果、製品ではなくマニュアルに不備があるらしいことがわかってきた。だが、べつに誤植があるわけではない。結局わからずじまいのまま、ある書体専門家に調査がゆだねられることになる。FAXで送信されてきたマニュアルを見た専門家は、その不備を瞬時に悟った。フツラのせいだ。

フツラは、幾何学的でスマートなサンセリフ書体である。デザイナーが「かっこいい」と感じて選んだこの書体はしかし、ナチスと強く結びついているのだ。ヒトラーが愛用した書体、アウシュビッツ駅の文字に使われた書体、それがフツラに着せられたイメージだった。フツラの使用はドイツではタブー視されており、隣国オランダでもそれに近い。その書体がイスラエルでどのように受け止められるかは、もはや書くまでもないだろう。

### 1.2 日本における書体の地位

言語が多種多様な存在であるのに対し、文字の源流は数種類しかない。たいていは、エジプト系か中国系かに分類される。ギリシャ文字・ラテン文字(ローマ字)・スラブ文字はすべてエジプトの影響を強く受けている。また西欧で使用されるラテン文字書体は、ロー

---

\*nabesin@m-net.ne.jp

マ帝国の碑文が元だ。

それにもかかわらず、それぞれの書体が強い国家性を有していることは珍しくない。たとえばギャラモンをフランス人は「われわれの文字」だと言い張っているし、ボドニといえばイタリアが想起される。イタリア料理店がメニューにギャラモンを使用したとすれば、それこそお笑いになってしまう。グーテンベルク以来 550 年にわたる書体活字の伝統は、活字自身に社会性を付与しているのである。

ところが一般に、日本では書体への関心がきわめて低い。先のほかにも、例をいくつもあげることができる。たとえば米国マイクロソフトのホームページでは自社の書体の長所が宣伝されているのに対し、同社日本法人のそれには「typography」という階層そのものが存在しない。また、エプソン・キヤノンなど各社のプリンターにどのような書体が搭載されているかを気にする者はわずかである。書籍で使われている書体が明朝体に偏っている事実を不思議に思う者は皆無にちがいない。

さらに、ごく少数の書体理解者にしても、書体を見る視点が美醜にかぎられていることが多い。その書体が背負っている意味や歴史を知る者は、出版を手がける編集者やデザイナーのあいだでも少ないだろう。たとえば、いま電子出版で標準的な地位を占めている日本語明朝体の源流をたどっていくと、大阪・森川龍文堂の新体明朝に行きつく。この書体が太平洋戦争の開始 2 日前に朝日新聞に採用され、真珠湾攻撃やシンガポール占領などの文面を華々しく飾ったという歴史(片塩[4] p.356)を知る者が、はたしてどれだけいるだろうか。

ただし、念のために注釈しておかななくてはならないことは、このような書体軽視が「活字離れ」たる現代にはじまったことではないという点だ。明治以来、国語・国字はしばしば問題とされてきた。しかし、書体そのものが問題視され、改良運動が広く起こったことはない。あったのは、戦時中の「ぜいたくは敵だ」思想のもと、特殊書体活字が溶かされていったことくらいである。それはこんにちの明朝体一辺倒に連なっているわけだが、書体軽視のあらわれだとはいえても書体の関心が高かった結果だとは到底いえない。

### 1.3 なぜ日本では書体への関心が薄いのか

以上、欧州では社会性が付与されてきた書体活字が日本では関心をもたれない事情を見てきた。その理由はいろいろ考えられるだろう。日本に金属活字が入ってきたのは江戸末期であり、欧州よりも歴史が浅いため、ということも大いにありうる。しかし、それではなぜ欧州では関心が高いのか。日本においてもあと数百年を経れば書体活字への関心が高まるのか。私には、そうは思えない。

私は、以下のような仮説が立てられるのではないかと考えている。すなわち、「日本で

は欧州とちがって書体にナショナリティを付与する必要がなかったため、書体への国民的関心が生まれなかった」というものだ。

もちろん、これはまだ推測でしかない。詳細な検証はこれから数年かけて行なうつもりでいるが、さしあたって疑似言語としての書体活字とナショナリティとの関係に触れておきたい。

## 2 書体活字のナショナリティ

### 2.1 ナショナリズムを形成する俗語出版

ヨーロッパにおいてナショナリズムが形成される<sup>1</sup>ためには、中世のラテン語・キリスト教的な普遍性をもった世界観が打破されねばならなかった。一国のナショナリズムは普遍的なものではなく、あくまで局所的・限定的なものだからである。このため、ラテン語に変わって俗語が台頭する必要があった。

その一方で、言語があまりに局所的であってもナショナリズムは形成されない。部族内での一体感は、ナショナリズムとは呼べないだろう。したがって、ある行政区域の中でしか通用しないが、その中ではあらゆる場所で通用する（かのように感じられる）性格を言語がもたなくてはならない。アンダーソン[1]によれば、この性格をもたらしたのは、資本主義の拡大による俗語出版物の増大だという。

アンダーソンは、欧州において国民意識の基礎を築いたのは出版による俗語だとし、その効果を3点にまとめている（アンダーソン[1] pp.84-85）。まず、当時の口語が多様なため困難だった意志疎通（相互理解）を印刷物が可能にしたこと、しかもその相互理解が同じ言語を解する者のあいだでのみ可能だと認識されたことが挙げられる。次に、出版によって言語が固定化されたこと。12世紀と15世紀ではまったく様相が異なるフランス語は、15世紀と17世紀とでは微少な差にとどまる。この固定性が「規律」としての文法と結びつくことは、のちに触れる。そして第3に、出版物が固定し権威づけられる（世界初のベストセラーはルターの聖書である）ことで、出版されるにいたった特定地域の俗語に社会的地位が与えられた点である。この言語がラテン語にかわる将来の国家語となるのだった。

---

<sup>1</sup> ナショナリズムの起源はヨーロッパではなく南米に求められることがアンダーソンによって明らかにされているが、ここでは触れない。

## 2.2 疑似言語としての書体

さて、この間に書体はどのような変遷をたどったのだろうか。書体そのものの歴史は、はるかローマ帝国にまで遡ることができる。しかし、グーテンベルク以降の書体活字の歴史は、まさに近代史・資本主義発展史と重なっている。

出版俗語がナショナリズムをうみだして以来、自らの言語こそが最高であるという主張がヨーロッパ各国で見受けられるようになってきた。

最も代表的な例が、フランスだろう。1539年にはヴィレール・コトレの勅令が発せられ、フランス語以外の言語による裁判記録の作成が禁止された。1635年にアカデミー・フランセーズが発足し、革命前にはリヴァロルによって『フランス語の普遍性について』が著わされ、ギリシャ語・ラテン語や英語などが情念の言語であるのに対し、フランス語が唯一の理性を活かせる言語であると主張されている。革命後、「国家の言語」は「国民の言語」へと所有者が移り、フランス市民とはフランス語を話す者だという定義がなされる（田中〔9〕 pp.232-235）。

だが、フランス語のすばらしさを説くときに使用する文字はラテン文字だ。イタリアは当然のことながら、スペインもイギリスも文字をラテン文字に依っている。これでは、他の言語と表現上の「差異」をつけることができない。そこで、差異の手段として書体に光が当てられたのではないだろうか。フランスを代表する書体・ギャラモンが生まれたのは、1545年だ。

このような差異化を極限にまで押し進めたところに、ナチス・ドイツがあるのではないだろうか。宣伝相ゲッペルスは「ドイツ民族の言葉、ドイツ民族の書体」運動を企画し、先のフツラとフラクツールとをドイツ民族の書体と定めた（片塩〔4〕 p.257）。アウシュビッツ駅を飾ったのがフツラだと先に述べたが、アウシュビッツ収容所の文字はフラクツールで書かれている。ドイツでは、この2書体が徹底的に用いられた。その傷が現在まで残っているのは、はじめに見たとおりだ。

## 2.3 規律としての文法

いま、他の言語と差異を作るために書体が決められたのではないかという推測を述べた。このことを裏返せば、自らの言語については同じ書体が用いられることになる。つまり、書体は同一性の象徴にもなっている。この節では「同一性」に注目し、書体から少し目をそらして文法をとりあげることしよう。

ただし、文法といっても言語学者のいうそれではない。ここでは、記述的ではなく規範的なものにかぎって用いる。いってみれば中学・高校で習う一般の文法である。また、つ

づりもふくめた広い意味で使用する。

フーコーは、教育界において規律・訓練的な時間が増大していく近代化の過程を巧みに述べている（フーコー[2] pp.141-172）。そこでは座席や運動など、おもに身体に関わる事例について言及されている。しかし私は、文法こそが最も重要な規律ではないかと考えるようになった。

フーコーにとってフランス語を操るのは自在だったかもしれない。しかしフランス語を学んだことがある者なら誰も、発音とは一致しない複雑な動詞のつづりに難儀させられたことだろう。また母音が20もあったり、rがややこしかったりと、発音にも苦労するはずだ。

だが、「正しい」フランス語はフランス人にとってすら修得が困難だったのだ。「18世紀末当時、1200万のフランス人口のうち半数はフランス語を話すことができず、わずか300万人だけが『正しい』フランス語が話せたという」（田中[9] p.234）。現在ですら、フランス国内に占めるフランス語話者は7割でしかない。

複雑な文法は、イギリスにおいても18世紀から19世紀にかけて盛んに組織された。その際、表面上の合理性やラテン語などからの権威性が重視されていたようだ。たとえば仮定法の要求話法に原形を使わず should を入れるようになったのもこのころだし（鈴木[8] p.12）、to と不定詞とのあいだに副詞を入れてはいけいという規範ができたのも当時だ（ピンカー[7] pp.210-211）。もともと発音どおりに書いていた dout に b を入れて doubt としたのは、明らかにラテン語を意識してのことである（グラムリー、ペツォールト[3] p.171）。このように、国民は「正しい」国語を話し・書くように自らを規律し、訓練するようになっていった。

この訓練の過程で使用された書体に、私は興味をもっている。国語の「正しい」姿を写しだした本は、それにふさわしい書体で印刷されたのだろうか。いずれ入手し、調べてみたい。

### 3 書体に興味を抱くこと

#### 3.1 日本の事情

近代の日本で自らの言語がどのように認識されたかについてはイ・ヨンスク[6]が詳しいので、以下参照する。

イ・ヨンスクは、森有礼による日本語廃止論にはじまり植民地政策にとどめをさす明治から戦前の言語政策論を詳述している。ここで頻繁に問題とされているキーワードとして、「国語」「国字」「仮名づかい」「標準語」が並んでいる。が、「書体」という文字は本書中に

いちども見つからない。このことから、いかに「書体」が日本では問題たりえなかったかを知ることができる。

しかし、それはある意味で当然のことだった。フランスでは「国字」といえばラテン文字しかありえなかった、それゆえ文字以下の次元つまり書体で差別化を図ることになったのだらうと推測した。だが日本では、漢字からの派生ではあるにしる仮名という国字、あるいは漢字仮名交じりという表記法そのものにナショナルリティが付与できる。それなのに、いちいち書体まで持ちだしたりする必要がなかったのだ。

### 3.2 悪い書体は読みづらい

では、現代人が書体に関心をもつべき理由はあるだろうか。この問いに答えるのは比較的簡単で、はっきりと「ある」。しかも、実用的見地からそれがいえる。以下に3点ほど掲げよう。

ときおり、新聞の組み方を縦ではなく横にせよという意見を目にすることがある。これからはラテン文字と混ぜて組むことが増えるだらうから、相性のよい横組にするのが望ましいというのがその理由だ。

一見もっともな主張のように思えるこの意見も、仮名が横組に不適切だという事実が忘れられている。ここでいう「不適切」とは、なにも伝統や習慣に根ざしたものではない。「あたらしいかなのかい」を創設した石原忍（元東京大学教授、眼科医）によれば、両仮名は「おおくの文字が右から左への、時計まわりの運動を内包しているために、横に組まれると、読む方向と字形の方向が、まったく逆の作用をして、眼の疲労をもたらす」（片塩[4] p.318）という。

だからローマ字化だ、と話を一気に進めるべきではないだらう。しかし横組において現在の書体に欠陥があるとわかっている以上、その欠陥を最小限にとどめる努力はなされてよいはずだ。

第2にもっと卑近な例をあげると、特に学術書で「読みづらい」本が増えてきている。安易な電子組版化によって組版や製本の基本的な知識がないがしろにされた結果、商業印刷とは思えない低次元の本が増えた。1行に多くの文字を詰め込みすぎたり、あるいは行間が足りなかったりするだけでなく、劣悪なたとえば平成明朝体などの読書に適さない書体が使われている。自著の組版結果に失望したことを端緒に自ら組版ソフトを製作したクヌースは、印刷技術の水準が高い日本に住んでいれば開発しようとは思わなかっただらうと述べた（クヌース[5] pp.16-17）。しかし、それも過去の話になりつつある。

もちろん、「低次元」と述べているのは中身ではなく外面である。内容が悪くない場合には、いっそう惜しい。具体例を挙げてしまって申し訳ないが、たとえばゲオルグ・クニー

ル、アルミン・ナセヒ『ルーマン社会システム論』(館野受男・池田貞夫・野崎和義訳、新泉社)など最悪の部類に入る。たいへん理解しやすい本なのに、もったいないと思う。『岩波講座・現代数学への入門』(岩波書店)シリーズはクヌースの開発した組版システムを使用しているが、クヌースが使わないように述べている古い数式書体を使用している<sup>2</sup>。

第3に、コンピューター画面の書体を考えてみよう。画面と紙との最大のちがいは、画面のほうが圧倒的に解像度が低い点にある。たとえば12ポイント(1ポイントは1/72インチ)の大きさの文字を通常のプリンターが約1万個の点で表現するのに対し、画面では200個前後の点でしか表現できない。このような大きな差があるのならば、書体設計の段階で工夫をこらさなければ画面上では読みづらくなってしまいうだろう。残念ながら、このような工夫は皆無である。

### 3.3 電子活字の夜明けがすぎて

2月16日、米国アップル社の最高経営責任者スティーブ・ジョブスの発言は、出版業界に波紋を投げかけた。これまで電子組版のデファクトスタンダードとなっていた書体はずし、別のメーカーの書体を標準として採用すると発表したのだ。知っている人は知っているだろうが、マッキントッシュは出版業界ではトップシェアを占めており、その標準書体を作成しているメーカーは自社製品の利用に厳しい制限を課していた。利用者の側も、けて「使えない」わけではないが飛び抜けて高品質でもないこの書体(そう、あなたがいま見ているこの書体だ)を利用せざるをえない状況にあった。今回の変更は電子活字に新たな流れをもたらすだろう。。電子組版から10年がすぎ、ようやく夜が明けた。

しかし、書体を取りまく環境を眺めると、気にかかることもある。現在、電子計算機で使用できる漢字の数を増やそうとする傾向にあるようだ。現存する漢字をすべて表示できるとうたう文字鏡という書体もある。先のアップル社の発表も、従来よりも倍以上の漢字が使えることを売りのひとつにしていた。

しかし大事なものは、漢字の数ではない。いくら漢字が多くとも、その品質が低ければどうしようもないのだ。8万字の漢字を備える文字鏡は、残念ながら素人版画の域を出ていない。数万の漢字を作成する労力があるなら、ふだん使われている数千字の改良にあたってほしいものだ。そして何より、画面できちんと読める日本語書体の開発をお願いしたい。この文章を推敲するのに何度も紙に出力する そんな状況から脱却することができることを私は切に希望している。

---

<sup>2</sup> 一般に、組版の質は出版社ではなく印刷会社で見たほうがよい。たとえば理想社や精興社は、いいものを出している。

## 参考文献

- [ 1 ] ベネディクト・アンダーソン. 想像の共同体. ネットワークの社会科学. NTT 出版, 1997. ( 白石さや・白石隆訳 ).
- [ 2 ] ミシェル・フーコー. 監獄の誕生 監視と処罰. 新潮社, 1977. ( 田村俣訳 ).
- [ 3 ] S. E. グラムリー, K. M. ペツォールト. 英語学の基礎. 北星堂書店, 1995. ( 新長馨訳 ).
- [ 4 ] 片塩二郎. 活字に憑かれた男たち. 朗文堂, 1999.
- [ 5 ] Donald E. Knuth. *Digital Typography*. CSLI lecture notes 78. Center for the Study of Language and Information, Leland Stanford Junior University, 1999.
- [ 6 ] イ・ヨンスク. 「国語」という思想. 岩波書店, 1996.
- [ 7 ] スティーブン・ピンカー. 言語を生み出す本能(下). NHK ブックス 741. 日本放送出版協会, 1995. ( 椋田直子訳 ).
- [ 8 ] 鈴木寛次. 発想転換の英文法. 丸善ライブラリー 249. 丸善, 1997.
- [ 9 ] 田中克彦. 言語からみた民族と国家. 岩波同時代ライブラリー 81. 岩波書店, 1991( 元 1978 ).